

ローカルサミットNEXT in小田原（2018. 10. 27~28）報告書

文責：ローカルサミット事務総長・吉澤保幸
（協力、東経大周ゼミ生）

開催日時；2018年10月27日（土）、28日（日）

開催場所；小田原市 鈴廣かまぼこの里

主催；実行委員会（鈴木梯介実行委員長）

共催他；場所文化フォーラム、小田原商工会議所、まち元気小田原、小田原観光協会、
かながわ西コンベンションビューロー、エネ経会議、も生文、健康医療開発機
構、

小田原市、環境省、箱根町、鈴廣蒲鉾本店他

参加者；初日168名、二日目104名、（男176名、女性96名）

1日目

13:00～挨拶（吉澤、鈴木、加藤小田原市長）

—2008年以降のローカルサミット開催を期にしての、ローカルからの変革の動きを、この
小田原の地で、皆で再確認しつつ、更なる深化を目指す、会合にしたい。

13:20～14:40 過去開催地からの進捗レポート

—帯広（後藤氏メッセージ）、松山・宇和島（福富氏）、小田原（鈴木氏）、南砺（久
保氏）、高崎（本木氏）、阿久根（中村氏）、高野山（平野氏メッセージ）、酒田（前
田氏）、
東近江（山口氏）、+桜井前南相馬市長

14:50～16:20 基調講演／問題提起

—石田秀輝・東北大名誉教授「ローカルから考える学びのか・た・ち」

～沖永良部島の文化を創り上げてきた5つのち・か・らの構造について説明があった。
5つのちからを、孫が大人になった時を見据えて伝えてゆく上で、受け止めなければ
ならない制約があり、それは、人・経済・地球環境である。少子高齢化、地方交
付税などの減少・温暖化による台風の増加・海洋流出プラスチックによる海岸汚染、
海産物汚染などに対し、「人と地球を考えた新しい暮らし方（環境と成長の両立）
で、お金が島の中で回り、お金が外から入って、人口が増え、笑顔も増える、仕事
が生まれ、人がやってくる憧れの島を目指す」と語った。（東経大報告書より）
～先生には、バックキャスト思考のもと重要になる、エネルギーの自足、食の自足
と共に、学び（教育）の自足を、星槎大学のサテライトキャンパスの開校も絡めて
沖永良部の独立に向けての動きを熱く語っていただきました。

学びも自足する！ ローカルが求めるリーダー育成教育を目指す

星槎大学サテライトカレッジin沖永良部島 開校式・入学式 2017.04.18

星槎大学が、カリキュラムと島独自のカリキュラムを融合させて、島のリーダーを育成する



開校式



島人によるベートーベン 交響曲第九番

方言バージョン

Copyright © Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab, LLC

Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab



島全部を大学に！

学びたいことを、学びたいときに、
学びたい場所で！（井上學長）

2018. 06. 09

Copyright © Emile H. Ishida, Earth Village Research Lab, LLC

一太田浩史・日本民藝協会常務理事「西郷どんと二宮尊徳」

～今年のNHK大河ドラマの主人公西郷隆盛と、小田原で生まれた二宮尊徳について語った。二宮尊徳は富を自分一人のものと思わず、自然を敬い、その力を最大限に引き出して豊かな生活をしていた。そのようなところに西郷隆盛は感銘を受けていた、と語った。（東経大報告書より）
～富田高慶の「報徳論語」に記された農本こそが国の民を救うというメッセージこそが、西郷どんが富国強兵に走る明治新政府に託したかった最後の言葉であった。そして、西郷どんと深い関係にあった庄内藩が廃藩置県後取り組んだ士族開墾の場こそが、松ヶ岡開墾場（酒井家当主）であった。報徳仕法で、小田原～南相馬～鹿児島～酒田・庄内という、LS開催地が繋がる歴史・思想の背景を語って頂いた。

莊内士族開墾始末

明治四年七月十四日、政府は廃藩置縣の命を發布し、封建を廃し、郡縣の制となす。大泉藩在內藩の旧稱。知事酒井忠宝公本官を免ぜられ、藩の常備首腦六大隊を始め、其他士卒軍隊全部を解除せらる。是に於いて藩士は藩祖忠勝公以來留世涵養し來りたる武士道と、節義廉恥の美風とを墜し、各自生計營利の業に趨はしり報國の目的を失わんことを憂へ、有志協同し藩祖の神前に於いて盟約を締結し開拓の事業に従事し、一は以て道義を修して士氣を振氣し、一は以て國産を興して力食富強の業を開発す。是れ戊辰の役に佐幕を主として王帳に抗したるも、出格至仁の恩召を以て酒井氏の家名を立てられたる寛典を蒙り、再生の皇恩に浴したる万一を報ぜん事を謀りて、この開拓を創始したる本旨なり。

(長谷川信夫著『西郷先生と莊内』財莊内南洲会編 一九九八年 七八頁)

富田高慶『報徳論語』

第十二 國の本は農にある事を論ず

それ國の本は民にあり、民の本は食にあり、食の本は農業にあり、之を以て農の道盛なれば民優なり、民優なれば國家の盛衰何ぞ論ずるを待たん。蓋し國の衰廢するもの一朝一夕の故にあらず、農衰へて民困苦し、民飢渴を免れずして然る後國の大患となる、如斯國の大本にして重んずべき道を往々農事は卑賤の業なりとす、他なし本末明かならざるが故なり。其明かならざるもの、譬へば池水に落葉の浮ぶや水ありて然る後に落葉浮ぶと雖も、浮ぶもの積る時は、之が為に池水を見ることを得ずして、池の本たるは水にある事を忘れ、落葉を以て池となすが如し、若し水を見んとせば、其後に積れる落葉を掻き分けて見ざれば、水は本にして落葉は末なる事を弁じ難し。

一 藻谷浩介・日本総研主席研究員「日本の問題は循環再生の不全」

- ～ 化石燃料の発見が人間の本末転倒だとし、海洋流出プラスチックによる汚染は化石燃料によるもので、現在の地球環境問題の原因にもなっていると述べた。（東経大報告書より）
- ～ 小田原にも通って頂いている同氏からは、いつも通り事実・統計に基づいて、日本の問題は、お金が無いのではなく、里山資本主義に基づく循環・再生への取り組みを怠っていることを熱く語って頂いた上で、小職も初めてのスライドを使って、我々世代が人生の次なる高みを目指す道筋を提唱していただいた。



16:35～18:15 分科会／ディスカッション

ー第1分科会 ローカルファイナンス

～「地域の自立・循環のために、いのちをつなぐローカルファイナンスの未来の形を探る！」がテーマで、モデレーターは吉澤保幸・ローカルサミット事務総長、パネリストは地元から加藤正晃・さがみ信用金庫常務理事、山本博文・横浜銀行理事の2名と、域外からは野地雅人・プラスソーシャルインベストメント代表取締役社長、古里圭史・飛騨信用組合常勤理事総務部長、古内奏人・ONE FINACIAL創設者兼CEOであった。

地方金融機関からの具体的金融変革のかたちについて、加藤正晃常務理事、山本博文理事が講演した。従来の金融機能から、何が変わるべきなのかについて話していただいた。その後、野地雅人代表取締役社長、古里圭史常勤理事総務部長、古内奏人創設者兼CEOが、「金融技術革新等を捉えた、新たなローカルファイナンスの形」、「若者への金融リテラシー浸透上の課題」、「地域活性化と金融アクセス」、「未来のローカルファイナンスのあり方」などの内容で講演した。講演後、地域通貨発展への取り組みについて討論した。新しい金融技術であるFINTECH・AIの活用、地域ファンドや地域通貨について議論が白熱し、様々な結論を出していた。そのなかでも、ONE FINACIALの取り組み方と地域通貨が地方金融機関とマッチングすると今までにないものができるのではないかと期待が寄せられた。近い将来、実現すれば自分たちの生活がどう変化するか楽しみになる有意義な分科会だった。（東経大報告書より）

ー第2分科会 教育・次世代・インクルーシブ

～日本各地で今回のテーマに関する活動を行っている方5人をゲストに迎え、それぞれの活動内容などについて紹介があった。モデレーターは、梶谷俊介・岡山トヨタ代表取締役社長、パネリストは、地元からは萩原美由紀・NPOアールドヴィーヴル理事長、瀬戸ひふみ・瀬戸建設の2名、域外からは山口美知子・東近江市役所、室貴由輝・岡山後楽館高校教頭、鬼頭秀一星槎大学副学長であった。

1人目の萩原美由紀理事長は、知的障害者を対象にアートを中心とする創作活動の場の提供を行っている方を紹介。主に、自立支援の他、子供たちの得意な事、やりたいことを仕事にして、社会とつながりを持ち、理解を深めていこうとの目的で活動している。

2人目の瀬戸ひふみ氏は、空き家バンク活動家の方による空き家の活用法等を紹介。条件を重視する不動産会社と違い、空き家バンクでは古さを魅力に家そのもの

が持つ良さを紹介し、地域活性プロジェクトに取り組んでいる。
3人目の山口美知子氏は、滋賀県東近江地域の歴史・文化、人と自然が調和して暮らす伝統的な価値観をどう次世代に伝えられるかについて話した。
4人目の室貴由輝教頭は、「やかげ小中高こども連合」の方による主な活動内容の紹介。子供たちの「やりたい・したい」を実現する場を設け、大人がレールを引かない「放校」を行っている」と説明した。5人目の鬼頭秀一副学長は、小田原の森里川海の維持や再生に役立つ商品に価値を付け、どうブランディング作業をしていくのかなどを話していただいた。
第2分科会を通じて、次代を生きる者にどう知識を伝達し、力を育んでいくかが急務だと実感した。そして地域発展には多くの試行錯誤・連携・協働が必要だと理解した。（同上）

―第3分科会 観光・国際交流

～観光と国際交流がテーマの第3分科会では「観光・国際交流」についてディスカッションを行った。モデレーターは、神津多可思・リコー社会経済研究所所長、パネリストは、外郎十衛門・小田原市観光協会副会長、杉崎早雲Jr華道家・小田原城下町理事長、古川達高かながわ西観光コンベンションビューロー代表理事、また、本学の周牧之教授と周ゼミ生が「小田原観光動態アンケート調査」を発表した。
まず、外郎十衛門副会長が小田原市の観光について発表した。2人目の杉崎早雲Jr理事長は、夜の小田原を盛り上げる一夜城のライトアップや、海を使った観光への取り組みについて話した。小田原市周辺2市8町で様々な取り組みを展開する古川達高代表理事は、小田原や箱根は知名度がありお金が集まるのに対し、周辺市町村は知名度も低く取り残されがちな現状と、その打開への模索について紹介した。
最後に周ゼミが「小田原観光動態アンケート調査」を発表した。この発表の為に、小田原で対面式のアンケート調査のほか、東京・新宿のルミネ前とバスタ新宿でQRコード記載のWEB版アンケート用チラシを配布し、合計4カ所で2種類のアンケート調査をおこなった。この結果、1100件もの回答が得られた。
アンケート調査結果を踏まえ、小田原市には多くの観光コンテンツがあるものの、それらの要素がバラバラなため、観光客をうまく回遊させられない現状について、発表した。同発表により大きな反響を得て、セッションのディスカッションが盛り上がった。（同上）

―第4分科会 エネルギーと食

～第4分科会では、モデレーターとして小山田大和・エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議理事を迎え、パネリストとして地元出身の泉勇氣環境省大臣官房環境計画課課長補佐、本山博幸松田町長、守屋輝彦神奈川県議会議員の3人に加え、域外から岡野智博高梨川流域学校事務局長、田林信哉総務省自治財政局長成果課長補佐の2人を招き、防災を含む地域間連携についてディスカッションを行った。
ディスカッションを通し、エネルギーや食に関する問題意識を確認することに意義があると認識した。そして、問題を認識することだけでなく、解決方法を考え、解決策や目標をどう掲げるべきかが課題だと考えた。
日本では、脱炭素化社会に向けて、RE100の実現と、そのための一例としてソーラーシェアリングの普及が必要である。再生可能エネルギーでエネルギー自給の環境作りが急務だ。パリ協定そして多くの外国企業によるRE100加盟とESG投資の実情を見ると、既にこれらは日本国内だけを見て考える問題ではなく、世界規模で考えるべき問題であることが伺えた。
ローカルサミットNEXTを通して問題を認識するだけではなく、問題解決に向けて実際に行動することこそ重要だとの認識に至った。（同上）

―第5分科会 地域間連携

～第5分科会では、東北大震災における救助作業や、行政と民間との連携をどうすべきかなどの連携をテーマに話した。
地域間連携（含：防災）のモデレーターとして今井良治東日本連携推進協議会事務局長を迎え、パネリストとして地元出身の泉勇氣環境省大臣官房環境計画課課長補佐、本山博幸松田町長、守屋輝彦神奈川県議会議員の3人に加え、域外から岡野智博高梨川流域学校事務局長、田林信哉総務省自治財政局長成果課長補佐の2人を招き、防災を含む地域間連携について話した。
震災救助の話題で、「救助を断られた」というナマの声を聞いた上で、民間企業と行政側のモノの見方の違いについて議論を進めた。連携するための合併の問題点として、当該地域の人々はその合併自体に賛成しているのか、効率重視に過ぎるので

はないか、など疑問が出された。結論として、それぞれ既にある枠組みを超えた元の「連携」が必要であるとの意見で一致した。（同上）

18:40～20:40 大交流会@レストラン「えれんなごっそ」

―地元の甲冑隊有志の方々によるほら貝と発砲により交流会をスタート。年に一度の同窓会、若者達との交流も加わり、大いに盛り上がった！

～なお、病院から駆けつけていただいた、鈴廣の看板お嬢様の智恵子会長にも、皆さんご挨拶でき、懇親の時間も頂戴いたしました。



21時頃～深夜 二次会@小田原駅前周辺 ～こちらも大いに盛り上がりました！

2日目 2018年10月28日（日）

10時～10時40分 分科会報告

―第1分科会（吉澤）、第2分科会（梶谷氏）、第3分科会（神津氏）、
第4分科会（小山田氏）、第5分科会（今井氏）

～5つの分科会それぞれから議論で見えてきた問題点やこれから進めていくべき事項

等が報告された。どの分科会も地域経済という視点から地域について考えていく必要性を話した。あらゆるテーマから考え、多角的な視点から出された意見は大変勉強になった。分科会はより長時間話を聞きたいと思う程、有意義だった。（東経大報告書より）
～各分科会の発表要旨は、添付資料をご参照頂きたく。

10時40分～11時15分 「新たな社会変革の潮流」

ー深尾昌峰・龍谷大教授；「ローカルファイナンス」を中心に

～「ローカルファイナンス」を中心にというテーマで現在の世界の流れを話した。SDGs表などがブーム化し、最近では、外側ばかりで中身が伴っていないことが問題だと語った。同時に、そのことに疑問を覚えて議論につなげる実質化への流れも起きていると期待を表明した。さらに、「効率性だけが良いわけではない。“めんどくささ”というものが資本になる」と述べて話を締めくくった。（東経大報告書より）
～先生には、当意即妙なやりとりも交えつつ、ESG投資・社会的投資という世界とローカルの接点と新たな挑戦を、自らのPSI（プラスソーシャルインベストメント）等の実践から、多様性やインクルージョンに関する具体的社会課題へのアプローチ・考え方等も含めて、熱く語って頂いた。

ー中井徳太郎・環境省大臣官房総合環境政策統括官；「地球温暖化の2℃目標やSDGsの達成に向けて」

～2℃目標やSDGs達成に向けて、新たな社会変革の潮流について行政や世界の取り組みを中心に話した。脱炭素＝不利ではなく、脱炭素しても経済成長は十二分にできること、また、現在の非持続的な社会からESG投資・カーボンプライシング・地域循環共生圏などを活用した脱炭素と持続可能な社会に移行し「新たな成長」を目指す、と述べた。（東経大報告書より）
～同氏からは、環境省の考える温暖化対策への根源的（ラディカルな）アプローチの全容をしっかりとつかうことができ、参加者からも「良くわかりました！」との声が聞かれた。第5次環境基本計画において閣議決定された、2050年に目指すべき持続可能な全ての生命（いのち）輝く「環境・生命文明社会」の構築に向け、地域循環共生圏とESG金融・カーボンプライシングの実装が急務であり、政府と各省庁横断の取り組み展開に全力を挙げると明言された。

第五次環境基本計画の概要



環境基本計画について

- 環境基本計画とは、環境基本法第15条に基づき、**環境の保全に関する総合的かつ長期的な施策の大綱等**を定めるもの。
- 計画は**約6年ごとに見直し**（第四次計画は平成24年4月に閣議決定）。
- 平成29年2月に環境大臣から**計画見直しの諮問**を受け、中央環境審議会における審議を経て、平成30年4月9日に**答申**。
- 答申を踏まえ、**平成30年4月17日に第五次環境基本計画を閣議決定**。

現状・課題認識

- 我が国が抱える環境・経済・社会の課題は**相互に関連・複雑化**
- SDGs、パリ協定等、**時代の転換点**ともいえる国際的潮流

持続可能な社会に向けた基本的方向性

- SDGsの考え方も活用し、**環境・経済・社会の統合的向上を具体化**
 - 環境政策による、**経済社会システム、ライフスタイル、技術などあらゆる観点からのイノベーション創出**や、**経済・社会的課題の同時解決**に取り組む
 - 将来にわたって質の高い生活をもたらす**「新たな成長」**につなげていく
- 地域資源を持続可能な形で活用**
 - 各地域が**自立・分散型の社会**を形成し、**地域資源等を補完し支え合う「地域循環共生圏」**の創造を目指す
- 幅広い関係者とのパートナーシップを充実・強化**
 - これらを通じて、**持続可能な循環共生型の社会（「環境・生命文明社会」）**を目指す

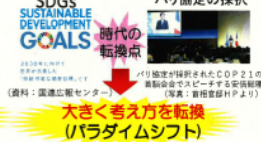
施策の展開

- 分野横断的な**6つの「重点戦略」**（経済、国土、地域、暮らし、技術、国際）を設定
- 環境リスク管理等の**環境保全の取組は、「重点戦略を支える環境政策」として揺るぎなく着実に推進**

我が国が抱える課題

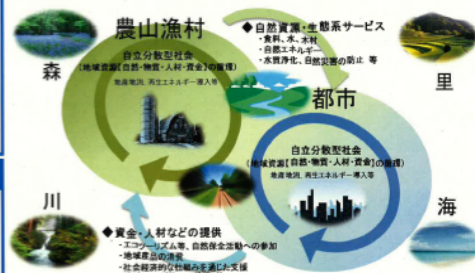


国際的な潮流



地域循環共生圏

- 各地域がその特性を生かした強みを発揮
- 地域資源を活かし、自立・分散型の社会**を形成
- 地域の特性に応じて補完し、支え合う**



脱炭素で持続可能な経済・社会への移行による「新たな成長」戦略

【世界の潮流＝脱炭素とSDGs】

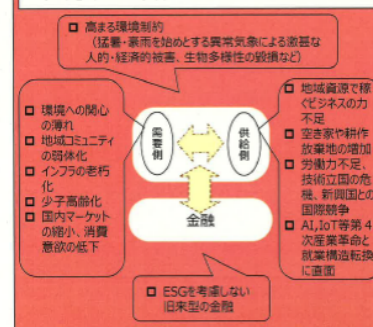
- パリ協定により、**従来どおりには化石燃料を燃やせない時代が今世紀後半には到来**。持続可能な開発目標（SDGs）に基づく世界の変革の決意。
- この**持続可能な経済・社会に向かう流れに逆行するビジネスは資金調達等が困難**。企業の経営戦略に大きく影響（RE100、ダイベストメントなど）。

- 世界で再生エネルギーコストは大幅に低下。RE100にはアップル、P&G、イケア、ウォルマート、ネスレなど、各業界の雄が参加。日本企業は積水ハウス、アスクル、イオンなど13社が参加。
- ドイツ銀行、アクサ、ロイズといった大手の金融機関や機関投資家が石炭関連投資からのダイベストメントを表明。
- 積水ハウスはZEH（ゼロ・エネルギー・ハウス）導入以降、最高益を四期連続更新中。水素自動車（FCV）はトヨタ、ホンダで世界シェアトップ。蓄電池（自動車用）はパナソニックが世界シェアトップ。

移行

非持続的な経済・社会

- 日本の直面する様々な環境・経済・社会の課題に対応した**新たなビジネス（モノ、サービス）・カネの流れを生み出せず、このままでは経済活動が長期停滞する可能性**。
- 気候変動問題への戦略的対応も後手に。日本企業のレピュテーションリスクにも影響し、サプライチェーンから外されるリスクも。



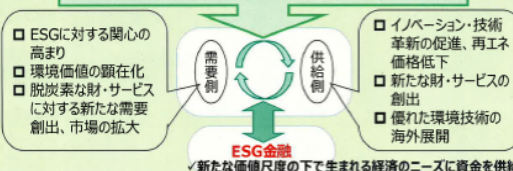
新たな成長（脱炭素で持続可能な経済・社会）

脱炭素・SDGsの具現化への資源配分シフト

- 産業競争力の強化**
 - ✓脱炭素化に向けて「**稼げる**」革新的技術の開発・普及
 - ✓脱炭素化に向けた産業育成・人材育成
 - ✓優れた技術で世界の脱炭素市場をリード etc.
- 地域循環共生圏の実現**
 - ✓コスト低減を進め、電源自立化を目指す再生エネルギー地域資源の最大限活用
 - ✓分散型エネルギーシステムの拡大につながるAI・IoTの活用
 - ✓新たなバリューチェーン形成による成長の実現
 - ✓都市のコパクト化・ネットワーク形成（公共交通等）
 - ✓気候変動への適応・防災・自然資源を用いた強靱性の向上 etc.

カーボンプライシング

- ✓脱炭素で持続可能な経済・社会における**価値尺度**として機能。
- ✓脱炭素化に向かうビジネスが「**稼げる**」**価格体系**を形成。
- ✓将来に対するビジネスの**予見可能性**を付与。 ※ 移行を促す過程で発生する経済への影響に配慮
- ✓持続可能な経済・社会の**基盤を整備**。



- 脱炭素とSDGsが生み出す**新たな経済・社会、マーケットへの転換に向けた資源（資金、人、モノ）配分の戦略的なシフトの加速化こそが成長を生む**。
- このシフトを円滑に行うため、**カーボンプライシングとESG金融**をセットで経済・社会の仕組みとしてビルドインし、**民間の主体的な活力をドライバーとする**。
- これにより、**産業競争力の強化と地域循環共生圏の実現**を果たし、**脱炭素で持続可能な社会・経済へとシフト（SDGsの達成）**。

11時50～12時；まとめ総括

ー鈴木悌介実行委員長

～「“ローカル”の再構築が必要だ」と力説した。これは「同じ市内で連携していく事だけがローカルなのだろうか？例えば中小企業同士が他地域で連携して良いもの

を作っていく事もローカルではないのか？」と述べ、より幅広いローカルな取り組みを目指すべきだと問題提起して締めくくった。（東経大報告書より）
～同氏から、下記メモを参照されながら、参加者の方々への御礼と共に、この間の議論していたことの実装が始まったこと、今後の課題は、ローカルの再定義、リアルとバーチャルの融合等ではないかと強調された。

.....
.....

1. 御礼
2. 今回の皆さんの報告や発言を聴いていて、
「これまでローカルサミット（以下LS）で議論してきたことが、いよいよ実現し始めた。実装が始まった。理念が現実のものになり始めた」と感じた。
例えば、
 - 1) 「お金のものさし」から「いのちのものさし」はESG投資という形で。
 - 2) 「フォアキャスト」から「バックキャスト」は「低炭素から脱炭素へ」という形で。
 - 3) 「持続可能な地域は持続可能なエネルギーで」は「RE100」という形で。
 - 4) SDG s はまさに場所文化そのもの。
No one will be left behind=和を以て貴しとする、全てに神は宿るなど、極めて日本的な価値観ではないか？
3. 改めてLSの存在価値と役割を再認識した2日間であった。
4. そして、課題も明らかになってきた。
 - ・どうローカルに落とし込むか？
 - ・伝えることの大切さ
 - ・キーワード
 - ・顔の見える関係
 - ・小さいからこそできる
5. さらに問題提起をひとつ
 - ・ローカルの定義とは？ サイバーとフィジカル
→これからのLSはどうあるべきか？ 次年度に向けて議論を始めたい。

～最後に、小職から、この間の鈴鹿の職員の方々による運営支援等に強く謝意を表明し、次年度の開催（場所は、今後検討であるが）をお約束し、終了とさせて頂きました。



(編集後記)

- ・まずもって、今回の報告書については、東経大周ゼミ生の貢献によるものであることに謝辞を表します。彼らは、第9回のローカルサミットIN倉敷から参加していただき、今回は、周ゼミ生によるアンケート調査を取りまとめ、第3分科会でも発表していたと共に、交流会にも参加し、前回第10回ローカルサミットIN東近江で交流を始めた龍谷大の学生方とも深く交流してもらいました。まちづくりの主演は彼ら達、次世代であることを確認させていただくことが出来ました。彼らを指導して頂いた周牧之東経大教授にも厚く御礼申し上げます。
- ～今回、周ゼミが調査研究を発表した第3分科会報告で、周ゼミのアンケート調査研究が相当数取り上げられ、まとめられていた。大勢参加者がいる中で、学生である我々周ゼミの意見がとりわけ大きく取り上げられたことに達成感を味わった。足で歩いて地道に実地調査を行った結果、1,000件以上のアンケートを集められ大きな成果を出すことができた。大勢の社会人に評価される良い経験ができて自信にもつながった。(東経大報告書より)
- ～なお、東経大ニュースで、彼らの報告書とアンケート調査が公開されていますので、是非ともご覧ください。

<https://www.tku.ac.jp/news/021594.html>

- ・今一つは、誠に残念な訃報のご報告です。今回のローカルサミットに一番乗りされ、交流会でも笑顔を絶やさず、2次会でも遅くまで懇談させて頂き、帰り際には、また来年と笑顔で理路につかれた、元富山国際大教授であった北野孝一先生が、小田原から帰られて10日も立たない時に突然の訃報が舞い込んだ。享年76歳。自らが活動されていた、大学周辺の林野でお仲間と草刈りの最中に急性心不全で亡くなられたとのこと。心からお悔やみ申し上げスト共に、残念無念で、涙がこみ上げてきます。先生とは、中井さんと富山のお仲間と立ち上げたNPO環日本海で、ご一緒させていただいて以来、小生と富山・南砺を繋いで頂き、また、何よりも第4回ローカルサミットIN南砺開催を、第3回ローカルサミットIN小田原の最終日、登壇されて宣言されたことを今でも鮮明に覚えています。先生の優しさ溢れるあのまなざしと笑顔を忘れることが出来ません。先生もご遺志をきちんと継いで、(富山)ローカルからの日本再生を改めてここに誓います。安らかにご永眠下さい。
- ・最後に、次回第2回ローカルサミットNEXTは、本年10月26日(土)～27日(日)に南砺で開催することに決まりました。南砺は、2011年、3.11から6ヵ月後に、第4回ローカルサミットを開催し、利賀の瞑想の里で、被害者の方々に黙祷をささげながら、人と人、人と自然、生と死のあらたな繋がりを紡ぎ直す、「いのちの紡ぎ直し」という言葉をキーワードにローカルサミット宣言を発した地であります。そして、ローカルサミット宣言に盛り込まれた、いのちの紡ぎ直しを化体する、エコビレッジ構想を田中幹夫市長が第2期の政治公約に取り込み、2012年以来、全国でも例のないエコビレッジ課を新設し、同構想の桜が池周辺地区での具体化を漸次進めてきています。今回は、この間のエコビレッジ構想の実装の姿を見ていただきながら、南砺から拓く新たな暮らし方(南砺版SDGsであり、この1月に設立される「南砺幸せ未来基金」に裏打ちされた地域循環共生圏の形)のあり方を、地域内外の老若男女、そして漸増している海外からの移住者の方々も交え、柳宗悦が「美の法門」を執筆し、南砺の地域の誇り「土徳」の聖地ともいえる城端別院(善徳寺)等、桜が池に程近い城端地区を中心に皆で語り合い、確実な変革の扉を開きたいと思いますので、是非とも、皆様方、南砺の地でお目にかかりましょう。(そして、南砺にご縁を頂いた、上述の北野

先生の一周忌を皆さんと一緒に参ることができれば幸甚です)

(別添) ローカルサミット**NEXT in**小田原 分科会報告資料

第1分科会ローカルファイナンス

モデレーター; 吉澤

(全体テーマ)

地域の自立・循環のために、いのちをつなぐ
ローカルファイナンスの未来の形を探る！

1、地域金融機関からの具体的金融変革のかたち
～さが信、浜銀の両パネリストへ！

2、金融技術革新等を捉えた、新たなローカル
ファイナンスの形への一歩

～**PSI, ONE・FINANCIAL**, さるぼぼコインからみえること！

地域金融機関と新たな金融の連携、
新たな金融技術とローカルファイナンスの融合の形？



金融機関と連携した新しい地域通貨のかたちが！

- ・地域通貨で、税金も給料も支払い可能
- ・スマホによる各種情報の活用
- ・社会課題の発掘と案件化と金融機関窓口の連携
- ・金融機関の持つ各種情報・技術の活用
- ・ローカルとは地域性、顔の見える多様な関係性



**地域通貨の信用はローカルでお金が巡りまわること！
様々な連携から小田原からの金融革新の期待も！**

第2分科会報告者 教育／次世代育成／女性活躍

梶谷俊介

パネリスト

障がい者に創作の場を提供している萩原さん、不便なところの空き家の魅力を発信している瀬戸さん、東近江市役所の変革を起こしている山口さん、小中高連携による地域活動をサポートしている室さん、共感理解を理念に教育活動を行っている鬼頭先生

・萩原さん

障がい者に創作活動の場を提供

本人たちがやってみたいと言ったことを実現する

技能指導ではなく、作っていることに共感し会話する

作ったモノを発信する機会として展示会を開催し、作った本人が思いを伝えるギャラリートークを重視。

それぞれの表現でお互いの思いを伝え合う、自己肯定感の向上、自分らしく生きる人生を提案。擁護されるだけの存在ではないこと

・瀬戸さん

デイサービス施設において、利用者の成長、自立を目指し、プロによる教室を実施。

空き家バンク活動、一般的な不動産屋の判断基準を疑い、多様な暮らし方のニーズを模索。

空き家DIYを実施し、空き家の魅力を発信することで駅から遠いところでも借り手が見つかる。住居だけでなく地域の魅力向上につながる店舗への利用も

・山口さん

地域の主役は次世代、今ある地域の様々な活動をどう次世代に繋いでいくか。

今ある活動を対象年代別にマッピングし、見える化する作業を地域の皆さんと展開する世代を超えて大人と子どもが共に教えあう場を通して、地元が最高と思いながら地域を支え合う関係をつくっていく。特に幼少期に自然の中で遊ぶ、学ぶことが地域への愛着を育む

・室さん

小中校生がまちをフィールド、やりたい、したいを実現する場を提供

活動を通して異年齢の子ども同士のとつながりと役割が生まれる場

子どもたちと地域の大人のつながり

子どもたちの活動がまちを動かす

子どもが大人を巻き込む

まちが元気になる

・鬼頭さん

共感理解、人を認める、人を排除しない、仲間をつくる、笑顔の連鎖

教員免許更新講習を地域の人と一緒にやる

地域ブランドを学校の先生に作ってもらうことをとおして、つながりをつくる

・梶谷さんコメント

生命体としての人間の理解から考える

大人の発想で教えるのではなく、本人のやりたいをサポートする。待つことの大切さ。

子どもや障害者から気づきをもらう、上下関係ではなく、一人ひとりの違いを認め合う相互理解。相互扶助の姿勢の大切さ。

異年齢、異質が共に集い地域を考え・行動するプラットフォームの大切さ

キーワードは違いを認め合う「共感」

2018/10/27第3分科会のまとめ

観光／国際交流

神津多可思

1. モデレータの問題提起

小田原の「関係人口」をさらに増やすにはどうしたら良いか？

2. 小田原ですでに実現していること

- ・ 小田原には、他の地域から人に来てもらうために必要な資源がちゃんとある（歴史、小田原城、自然、小田原を愛する人々）。
- ・ 県、市、商工会議所、観光協会などと連携しながら重層的な取り組みが行われている。
- ・ 特に2016年以降は、観光庁が日本版DMO（Destination Management Organization）を積極的に後押しする中で、様々なプロジェクトが推進されてきた（平成の城下町・宿場町構想、小田原城本通り活性化協議会、大相撲小田原場所など）。

3. なお課題として残っていること

- ・ なお小田原を知ってもらう努力の余地はある。
- ・ 外部の声
 - * 東京経済大学の周ゼミの調査（サンプル数1,102）では、小田原に一度来た人はまた来る傾向があることが分かった。
 - * もっとkiller contentsを戦略的に絞った方が効果的。
 - * 歩いて一回りできる範囲にいかに密度濃くcontentsを配置できるかが重要（周先生）。
 - * 難しいことではあるが、どの層（不特定多数か、seniorsか等）にどういう意図（お金を落としてもらう、また来てもらう、定住してもらう等）で知ってもらうのかという戦略の定めることが重要。
 - * inboundの訪問を増やすことは、それが地域を新しい方向に変えるものでもあるので、意識して取り組むべき（周先生）。

4. 人と人の結び付き

- ・ 人は人に会いに来るので、小田原の側で人を磨くことが大事（外郎さん）。
- ・ 人と人が結び付くためにもまずは来てもらうことが大事なので、全方向でがんばりたい（杉崎さん）。
- ・ 小田原だけでなく、神奈川県西部の2市8町全体としてもっと知ってもらうよう努力したい（古川さん）。

ローカルサミットNEXT第四分科会報告 エネルギー／食 小山田大和

分科会の共通言語

○食・エネルギーの地産池消→食・エネルギー含めた地域の自給率の向上

○小規模・地域・分散型のネットワークの重要性

↓それは、何の為にやるかといえば

○地域外に流失するお金を食い止め

→地域でお金を廻す

廻すスピードを加速する

○地域の安全保障

→誰が、農地、林地、ガス管、水道管を守るのか？

→当たり前の生活・経済の大前提

→わかちあい、ささえあいの仕組み

→地域の課題解決としてのシュタットベルケの議論

ソーラーシェアリングが潰れて、国が規制を強化しても、私たちが作ってきた方向性の流れは止まらない。潰れても潰れても(潰れるのは勘弁してほしいが)、めげずに立て直す。

最後まであきらめない。建て直しがきくのが自然エネルギー(原発はそういかないと撤去作業をして改めて感じた)なのだから。

応援、励ましてくれた仲間の皆さんに感謝します。必ず立て直します。

目的

全国各地で地方創生が進んでいる中、行政間では都市間連携、地元の周辺連携、友好都市、東日本連携など広域連携等いくつかの連携がある中で、連携することが手段ではなく「目的」になっていて、機能していないケースが多い。

そこで各地が連携のあり方や、大切な交流を確認しながら、市民参加の経済、文化、防災、日常の向上に生かしていくための議論、研究、アイデア出しが必要と考え、この分科会を設置しました。

ポイント

- 1、民間企業では目的は明確。
- 2、地域経済の活性化が互いに必要
- 3、行政だけの連携で終わるのではなく、市民、民間企業へ普及していくように努力をしていく
- 4、「個の知ってる」の活用方法
- 5、自立、独立をしていくためのもの
- 6、プラットフォームビルダー

状況

- 1、友好都市、周辺地域連携、広域連携、防災協定、〇〇繋がり
- 2、今ある連携を生かしていない
- 3、市域、県域にこだわりすぎている
- 4、地域間連携という言葉が自治体の言葉になっている
- 5、議会からの要望も多い
- 6、効率重視の連携のみで自立、独立のためにやっていない
- 7、連携疲弊
- 8、顔の見える関係(この関わり)
- 9、行政用語になっている。

行政連携から発したそれぞれの地域間連携が、「文化、経済、交流」などを通じて、行政の枠から互いの民間企業、市民が地域間の安全、未来、日常にもしっかりと連携が浸透して行くように日頃からサポートして育てて行くことが大切。

緊急時にはその連携が行政部署間だけではなく、民間、市民が自発的にアメンバー方式で広がって行くべきと思えます。

「引き続き検討事項」として皆様のご協力をよろしくお願いします。

ローカル サミット NEXT in 小田原

2018
10.27_土-28_日

鈴廣かまぼこの里 かまぼこ博物館 3F
神奈川県小田原市風祭245
箱根登山鉄道「風祭駅」徒歩3分

参加費 12,000 円（一律） 会場費、交流会など含む
（宿泊費、二次会、エクスカージョン、交通費等は別途）

10/27 土 12:00～

オリエンテーション
過去の開催地よりレポート
改めて問題提起
分科／ディスカッション
交流会

10/28 日 9:45～

小田原城天守閣見学&城址公園散策*
まとめセッション
小田原まち歩き*
*（オプションのエクスカージョン）



参加申込サイト www.lsnnext.jp

作品提供：NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル <http://artdevivre-odawara.jp>

主催：ローカルサミットNEXT in Odawara 実行委員会
共催：（一社）場所文化フォーラム、小田原箱根商工会議所、（一社）まち元気小田原、（一社）小田原市観光協会、
（一社）かながわ西コンベンションビューロー、（一社）エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議
協賛：（一社）ものづくり生命文明機構、NPO 法人健康医療開発機構
協力：環境省（申請中）、つなげよう、支えよう森里川海、小田原市、箱根町、株式会社鈴廣蒲鉾本店



参加のお申込はWebサイトから！
www.lsnnext.jp

ローカルサミットNEXT in 小田原



2008年から全国各地で開催していたローカルサミットは、10回を重ねたことを機に、その内容と方法を見直し、これまでの実績を活かし過去開催地の進捗の共有と新たな知恵と力を集める場として「ローカルサミットNEXT」として再スタートします。

会場：鈴鹿かまぼこの里 かまぼこ博物館 3F
神奈川県小田原市風祭245

JR東海道新幹線・小田急線「小田原駅」よりタクシー利用 所要時間 約10分
箱根登山鉄道「風祭駅」徒歩3分
箱根登山バス・伊豆箱根バス「風祭停留所」下車すぐ

Program

10/27 土

12:00～	登録
13:00-13:15 (15分)	オリエンテーション
13:15-14:55 (100分)	過去の開催地よりレポート
14:55-16:25 (90分)	改めて問題提起
	石田秀輝氏（東北大学名誉教授）
	太田浩史氏（日本民藝協会常務理事）
	藻谷浩介氏（日本総研主席研究員）
16:30-18:00 (90分)	分科会 / ディスカッション
	5つのテーマに分かれ、それぞれ5人（域外から3人＋地元から2人）のパネリストによるプレゼンテーションの後、車座になり意見交換をします。
	ファイナンス
	教育 / 次世代育成 / 女性活躍
	観光 / 国際交流
	エネルギー / 食
	地域間連携 / 地域循環共生圏
18:00-18:30 (30分)	移動 徒歩
18:30-20:30 (120分)	交流会@レストラン「えれんなごっそ」 （鈴鹿かまぼこの里）
20:30-	二次会@小田原駅前周辺

登壇者

テーマ



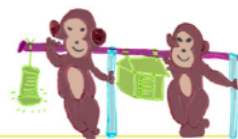
宿泊

東横イン小田原駅東口
（小田原駅前・50室限定）

10/28 日

8:00-9:00 (60分)	小田原城天守閣見学&城址公園散策 （オプションのエクスカージョン）
9:45（集合）	会場：鈴鹿かまぼこの里 かまぼこ博物館 3F 研修室オリエンテーション
10:00-12:00 (120分)	まとめセッション
	1. 分科会からの報告（5分×5）
	2. まとめコメント（45分×2名）
	今回の分科会のテーマに造詣の深い2人のスピーカーに新たな社会変革の潮流というテーマで総括の講演をお願いします。
	深尾昌峰氏（龍谷大学教授）
	中井徳太郎
	（環境省大臣官房総合環境政策統括官）
12:00	解散
13:30-15:30	小田原まち歩き （オプションのエクスカージョン） lsnext.jpにて発表予定

講師



参加費 12,000円（一律） 会場費、交流会など含む（宿泊費、二次会、エクスカージョン、交通費等は別途）

※当日、受付にて現金支払となります

お問い合わせ先

ローカルサミット事務局 ryoji615@gmail.com

詳細はウェブサイトをご参照ください <http://lsnext.jp>



作品提供：NPO法人アール・ド・ヴィーヴル <http://artdevivre-odawara.jp>

分科会 1. ローカルファイナンス

モデレーター・古澤保幸氏（ローカルサミット 事務総長）

パネリスト 地元・加藤正見氏（さがみ信用金庫 常務理事）

・山本博文氏（横浜銀行 理事・小田原支店長）

域外・野地雅人氏（プラスソーシャルインベストメント㈱ 代表取締役社長）

・古里圭史氏（飛騨信用組合 常勤理事総務部長）

・山内奏人氏（ONE FINANCIAL ㈱ CEO・創業者）



分科会 2. 教育・次世代・インクルーシブ

モデレーター・梶谷俊介氏（岡山トヨタ㈱ 代表取締役社長）

パネリスト 地元・萩原美由紀氏（NPO アールドヴィーヴル 理事長）

・瀬戸ひふみ氏（瀬戸建設㈱）

域外・山口美知子氏（東近江市 森と水政策課（公財）東近江三方よし基金事務局）

・室貴由輝氏（岡山後楽館高校 教頭）

・鬼頭秀一氏（星槎大学 副学長）

分科会 3. 観光／国際交流

モデレーター・神津多可恵氏（㈱リコー 執行役員・リコー社会経済研究所 所長）

パネリスト 地元・外郎藤右衛門氏（（一社）小田原市観光協会会長・園ういろう代表取締役・外郎家 25 代家主）

・古川達高氏（㈱エスアールシー 代表取締役㈱・まちかど案内所 代表取締役）

・杉崎宗雲 Jr 氏（㈱東洋堂・ト一社）小田原地下町 理事長・（旧）まち元製小田原 業務執行社員）

域外・周牧之氏（東京経済大学 経済学部 教授）

・藤谷浩介氏（㈱日本総合研究所 主席研究員）

分科会 4. エネルギー／食

モデレーター・小山田大和氏（（一社）エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議 理事／事務局長）

パネリスト 地元・古川剛士氏（ECHO・小田原箱根エネルギーコンソシアム）

・石井久喜氏（はなまる農園）

域外・乾正博氏（（一社）日本サステナブルコミュニティ協会 副代表理事）

・豊岡和美氏（（一社）徳島地域エネルギー 理事／事務局長）

・ラウパッパ氏（（一社）日本シュタットベルグネットワーク 代表理事）

分科会 5. 地域間連携（食・防災）

モデレーター・今井良治氏（東日本連携推進協議会 事務局長・ローカルサミット 事務局長）

パネリスト 地元・泉勇気氏（環境省 大臣官房環境計画課 課長補佐）

・本山博幸氏（松田町長）

・守屋輝彦氏（神奈川県議会議員）

域外・阿野智博氏（（一社）高梁川流域学校 事務局長）

・田林信哉氏（総務省自治財政局調整課 課長補佐・前南相馬市副市長）

